

# 裁縫教科書に見られる裁ち方の変遷

## —明治初期から現在—

Transition of Cutting the Way Seen in Sewing Textbook  
—The Early Meiji Era from the Current—

加藤 花苗  
Kanae Kato

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 修士課程

キーワード : 裁縫教科書, 着物, 裁ち方,  
Key words : Sewing Textbook, Kimono, Cutting

### 1. 研究の背景・目的

本研究では、明治初期から現在まで学校教育において使用されていた裁縫書を研究対象として調査分類を行い、各時代独自の裁縫の在り方について研究を行う。また、現在までに至る教科書の家事裁縫を中心に教科書としての比較を行い、和服裁縫技術の変遷についての考察を行うと共に今後の教科書の在り方について考えていくことを目的とする。

本研究の背景として、現在多くの日本人が洋服を着用し生活を送っている。その中で、和服を着用し生活を送る日本人はほんのひと握りであると考えられる。着物は長い歴史の中で多くの人に親しまれ、日本の伝統文化の一つとされている。しかし、洋装化が進み普段着として洋服を着用することで、和服の着用が減少し和服への関心が希薄化している。日本の伝統文化の素晴らしさをより多くの人に拡散していくためには、和服教本の内容についての理解は必要不可欠であると考えられる。経済の発展と共に変化する教科書本について、理解を深め現在の家庭科の教科書と比較し、今後の教科書（和服の仕立て方本）のあり方について考えていくことで多くの若者が和服への興味を持つことができ、日本の伝統文化について関心を持つことが出来ると考える。

本研究期間内では、学校教育を目的で記された最古の「裁縫書」をまず収集し、そこに記されている内容解析を行う。続いて、現在までに至る教科書の和服分野について調査・解析を経て、これからの和服と教科書のあり方について研究を行う。

本研究の学術的な特色・独創的な点は、日本文化が現在、見直されている反面、家庭裁縫は皆無の状態にある。昭和 20(1945)年代頃迄は、当然のように家族の着物は家庭内裁縫で賄われていた。いつの間にか激変し、書店の店頭に出向いても和服裁縫の書籍は実に少ない現況にある。そこで和服裁縫の歴史を振り返り、先人たちの残された研究の足跡を論文にまとめることは重要であると考えた。

### 2. 方法

本研究では、裁縫教科書の記載内容の現状を理解する必要がある。よって、明治初期から現在まで使用されていた裁縫教科書を収集し、年代ごとに分類を行う。分類ごとでどのようなことが記載されており、どう変化されてきたのかについて調査を行った。

裁縫教科書として、11冊入手することができ、これらを年代ごとに分類し記載内容を分析し考察を行った。分類としては、明治初期から平成までの10年ずつとし、年代ごとの記載内容の分析を行った。年代ごとでどんな内容が記載されておりどう変化してきたのかについて1つの表にまとめ、結果を元に考察を行った。

これらを踏まえて、今後の裁縫教科書の在り方について考察をし、細かい手作業や分かりにくい工程を1人1人が理解できるような新たな裁縫教科書を展開する。また、これを通してより多くの人が和服に興味を持てるような裁縫教科書の提案を行った。

### 3. 結果・考察

本研究での結果として、明治初期から現在までにかけて印刷方法や書体、言葉遣い、記載内容についての変化が見られた。

日本初期の国産製紙は、唐紙を模範として麻を原料としており、やがて容易に入手出来る楮を原料として利用していた。これを用いた紙を楮紙と呼んでいた。平安時代になると、貴族の間では和歌や漢文、書などに用いられており、より質の高い雁皮紙が利用されていた。それから薄くて美しく、細字でもにじむことなく正確に書くことができる雁皮を原料とした雁皮紙を使用していた。

和紙の種類として、麻や楮、雁皮、三桮が主に使用されていたことが分かった。明治 22(1889)年以降では、日本で亜硫酸パルプ、碎木パルプが製造出来るようになり、木材を原料とする基礎が出来上がる。そのため、明治 33(1900)年ごろになると新たな抄紙機が取り入れられ、明治 36(1903)年には、教科書用紙が和紙から洋紙に変化する。

明治初期から明治 35(1902)年までは和紙の原料となる麻や楮、雁皮、三桮等の和紙を使った教科書を使用していたが、明治 36(1903)年以降からは木材を使った洋紙を使用するようになったことが分かった。そのため、明治は和紙と洋紙両方を使用していた時代と考えられる。

書体については、現在は漢字や平仮名、片仮名を組み合わせて使用している。これらの文字を併用して表記された文章について、仮名交または仮名交文と呼んでいる。現在の日本での標準的な文章とされている。明治初期では教科書に活字を使用し、筆で書いた文字を木に彫って木版として印刷したものを使用していた。

明治時代では、教育制度の変化に伴い大量の言語が現れ、文字の読み書きが出来る国民が増加した。それにより、言語そのものに変化が現れたとされている。明治 33 年では、変体仮名と呼ばれる文字を使用していた。口語体が広く用いられるようになる。日本語の書きづらさについて議論があり、それに伴い文部科学省は、明治 33(1900)年に日本語表記教育の改善を図るとして以下の 3 つの改革を行った。1 点目は、平仮名の字体を標準化し、それ以外を変体仮名として排除すること。2 点目は漢字の字母数制限を行い、初等教育では 1200 字に絞ること。3 点目は、実際の発音に合わなくなっていた漢語のかな表現の改革を行うことである。しかし、1 点目、2 点目については広く受

け入れられたが、3 点目については激しい反発を呼び、明治 41(1908)年に取り下げられてしまった。終戦直後に、現代仮名遣いの採用や当用漢字・教育漢字の統一書体・人名用漢字の発布により現在のような文字が使用され、それとともに言葉遣いについても変化してきたのではないかと考える。

記載内容について、明治初期以前は製作についての説明文などの記載がなく、図面と名称、寸法等のみ記載されているだけでしたが、明治初期の教科書になると図面と説明文、寸法の計算式が細かく記載されていた。しかし、現代の教科書とは異なり、cm や m ではなく尺や寸を使用していた。現代の教科書よりも内容量が多く、女物と男物着物の袷や単、羽織、子供の着物、綿の入れ方や運針の方法等が記載されていた。他にも座布団の縫製についても記載されていた。明治初期から現在までの教科書を比較しても、昔に比べて記載内容の量と図の量の減少が大きな変化と言えるだろう。現在の中学生や高校生等が使用する家庭科の教科書には、着物の縫製を記載している教科書はほとんどない。主に浴衣の着付けや畳み方、名称、織物等についての記載のみである。日本女性が着物についての意識の低下について、現在使用する家庭科の教科書の記載内容の減少が原因と私は考える。

### 4. 今後の課題

今後の取り組みとして、近年授業内で電子黒板やタブレットを使用しながら授業が行われている。これらを用いて、以前まで取り入れられていた和服の製作について導入を進め、動画などで細かい作業等をデータとして残し、授業内で閲覧させ製作させるよう取り組んでいくことが必要であると考える。裁縫の得意な生徒、不得意な生徒がいるため、1 人 1 人に合った縫製の実習を行わせる。そのため事前に裁縫についてのアンケートや簡単な縫製練習をさせる。実習だけではなく、クイズ形式で和服に関する問題を作成し、色彩検定や着物検定の問題なども導入し、和服について身近に触れられる環境を作り、生徒の着物への知識や技術を身につけるとともに、和服の意識の向上を図る。こうしたことを中学・高校と積み重ねていくことで、次第に着物の魅力や素晴らしさを感じ取ることが出来ると私は考える。

### 付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所の「大

大学院生研究助成(B)」(DB2808)により研究助成を受けたものである。

#### 参考文献

- [1]松村豊 今村品子(1935) 新々 裁縫教科書 和裁改訂版 2巻,3巻, 東京. 盛林堂. 蔵版  
[2]渡邊辰五郎(1870) 裁縫教科書 1巻,2巻,3巻

- [3]村林益子(1990) 図説きものの仕立方, 紫紅社  
[4]裁縫手引艸乾(1875)  
[5]渡邊辰五郎(1955) 裁縫教科書 1巻,2巻,3巻, 東京裁縫女学校  
[6]渡辺滋(1966)新裁縫教科書 1巻,2巻, 東京女学校出版部